

# 桜友会報

第8号  
2013.5.10

昭和女子大学附属昭和小学校同窓会

「桜友会」

〒154-8533

東京都世田谷区太子堂1丁目7番57号

## 創立60周年の母校への

## 思いを形に残したい

桜友会会長 中田 彰生

私たちが卒業した初等部、正確には昭和女子大学附属昭和小学校は今年で創立60周年、人間で言えば還暦を迎えました。桜友会は50周年の時には、まだ活動していなかったたので、復活以来初めての区切りの年となります。

昨年の桜友会総会・懇親会で、小島副理事長は初等部の40年史、50年史をもとに創立時の様子を話してくださいました。小学校を作ったのは「三つ子の魂百まで」、つまり小さい子どもころから学園で教育しないと世のため、人のためになる人材は育てられないという人見楠郎先生（二代目校長）の強い思いがあったこと。また、戦後の復興途上の時代に、私立の小学校を作るのは冒険であるとの反対論を押し切った幼稚園、そして初等部の創設だったとのことでした。

また、桜友会第一回の総会では、前理事長の人見楷子先生が、初等部児童募集の手作りポスターを楠郎先生と親子で電信柱に張って歩いた想いを語ってくだ

さいました。

昨年総会で対談いただいた、創立まもなく教壇に立たれた間藤侑先生と有賀三奈子先生のお話でも分かるように、戦後の混乱からようやく立ち直ろうとしている時代に、ゼロからの出発で初等部を作り上げ、私たちを教えてくださいました先生方の力と、それを受け継いだ多くの先生方の努力が今日の初等部を築いてくださったものと思います。そのお蔭で、第2回の総会で演奏を披露してくださいました宮田まゆみさん、第6回総会で講演してくださいました慶応義塾大学でヒト・P・S細胞研究の代表者、岡野栄之さんなど優れた人材を同窓生として持つことができました。

母校への感謝の気持ちを形として残したいとの思いから、桜友会は60周年を記念する三つの活動に取り組みます。

第一は、私たちの後輩となる在校生やこれから入学してくる子どもたちのためになるプレゼントをすること。そのため

の寄付金を募集します。その一助に、昨年の昭和祭（初等部の学園祭）ではバザーを行いました。

第二は、学校と協力して祝賀記念行事を行うこと。学校では9月22日に卒業生を中心とした記念行事を計画しています。午前中は、卒業生が参観できる授業を行い、午後は記念式典と懇親会を予定しています。是非ともご参加ください。

第三は、卒業生からみた学校の歴史を記録すること。その試みの一つとして、前述のとおり間藤先生と有賀先生に対談していただきました。

役員一同、こうした記念行事を成功させ、その後は初等部と同窓会の新たな発展に力を尽くしますので、同窓生の皆さんのご協力をお願いします。

（現校長小泉先生の寄稿を2面に、間藤先生・有賀先生対談の詳細を4～7面に掲載してあります）

### これからの子らに贈り物を 寄付募集します

初等部は、今年、創立60周年を迎えます。初等部の先生方は、ゲームで遊ぶことの多くなった生徒たちに、野に出て自由自在に遊びまわる時間を持つてほしいと考え、玄関前にツリーハウスを建築する計画などもあるようです。同窓会では、

### 「文化散歩シリーズ」第2回 神楽坂で夏を楽しむ

花街だった神楽坂の横丁、小路を歩き、粋な黒塀の料理店で同窓生と涼しいランチを楽しみませんか。ご家族とご一緒でも歓迎です。

散歩日 8月17日（土）

集合時間 11時30分

集合場所 JR飯田橋駅西口 改札口

費用 食事代（3000円＋α）

申し込み 7月15日締切。

氏名、卒業回（または卒業年、電話番号）と参加人数を明記して下記のいずれかの方法で連絡ください。

・メール (ohyu@swu.ac.jp)

・はがき

〒154-8533 世田谷区太子堂1-7

昭和女子大学総務部内桜友会

・ファクシミリ 03-3487-6850

この機会に、初等部の教育に寄与できるものを記念品にしたいと考えます。昨年の昭和祭でのバザーなどにより現在17万円集まりましたが、まだまだ足りません。できるだけ多くの卒業生で初等部60周年をお祝いしたいと思いますので、一口（千円）でも寄付をお願いします。同封しました60周年寄付専用の郵便振替用紙をご利用ください。

# 創立六十周年を迎えるにあたって

## このエコの時代に



小泉 清 裕

長年世話になった車を昨  
年秋に買い換  
えた。購入す  
る車種の選択  
については、

人間が使用できる石油の終わりが想定されてきた今日、燃費の良い車にすることを優先順位の高いところに置きたいと考えた。そして私にとって初めてのハイブリッド車を選ぶことにした。

乗りはじめてわかったことだが、燃費良く走った時には、エンジンを切った際に、表示版にその時の一リットルあたりの平均キロ数と同時に、「Excellent」という文字が表示される。車に褒められてどうなのか、という思いと同時に、めったに人から褒められなくなったこともあり、車から降りるときになんとなく誇らしい気持ちになっている。

ハイブリッド車のこれらの表示盤を見ていて、一定の速度で平坦な道を進んでいる時には、思ったよりもガソリンを使用しないことがわかった。同時に、停車した後、再発進をする時と、坂道を登る時に、大きなエネルギーを必要とし、燃費が急激に下がるのが判明した。

ハイブリッド車の購入を考えていた時、伊豆の湯河原で、ハイブリッド車のタクシーに乗った。運転手にどのくらい

の燃費かと尋ねると、予想をはるかに下回る答えが返ってきて、聞き間違えたのではないかと思うことがあった。湯河原は坂道が多く、ハイブリッド車の燃費が悪くなる条件の町なのだと、あとになって理解することができた。

ところで、昭和小学校は、平成二十五年度に創立六十周年を迎える。いわゆる還暦の年である。還暦は文字の通り、暦が一周して、もう一度新たな時代へ出発することを意味している。

学校の還暦を祝うということは、今までの六十年間を振り返り、その六十年を正しく評価し、その上で新しい出発の時を迎えることである。今まで回っていた「環」から飛び出し、新しい「環」をつくり出すことである。六十年という長い時間と、その間に培ってきたことの大きさを振り返れば、新しい「環」の創造には、大きなエネルギーが必要であることは明白である。何から何までエコの時代になっているこのご時世に、思いっきりエネルギーを注ぎ込んで、大きな爆発を生じさせることは、現代社会の中で忘れ去られていることのようにも思う。

しかし、そのような時代だからこそ、さまざまな取り組みが求められ、試行錯誤を繰り返して、その結果として新たな「環」を創らなければならぬ。そして、その取り組みをスタートさせるには、創

造を越えた巨大なエネルギーが必要である。最初のこの強大なエネルギーなくして、すべてのものの発進はありえない。

六十年前には、今以上に大きなエネルギーが注がれて、昭和小学校が創立されたはずである。創立にあたっての巨大なエネルギーとその後の努力によつて、六十年後の今日まで、昭和小学校が見事に進み続けてくることができた。

六十周年を迎え、新たな「環」をつくりだす時期が来た。新たな「環」を創るためにも、たぶん六十年前に注がれたのと同様の、巨大なエネルギーが必要である。そして、その先にも、急な坂道やでこぼこ道が連続することが予測される。時には、道のないところに新たな道を作りながら進まなければならないはずである。そのことを承知して、創立六十周年を迎える準備をしなければならない。ロケットを宇宙に飛ばすのにも、地球の引力に逆らって、立っている場所から発射する瞬間に最大の力があるそうだ。一旦、宇宙に行つてしまえば、エネルギーをほとんど使わずに、エコ状態で軌道を回り続けることができるのである。

還暦を迎え、新たな時代へのスタートをきる本校にとつて、教職員と在校生、その保護者、そして数多くの卒業生が力を合わせて、最大のエネルギーをそそがなければならぬと感じている。飛び出す方向と高さを十分に計算し、一気に、創立六十年の重みのある学校を新しい世界に出发させたいと願っている。

（昭和小学校父母会報『しようわ』百二十四号にも同一原稿を掲載）

## ランチルームに招かれて

昨年十月、後輩の初等部の子どもたちと給食を——とお誘いをいただいた。

ランチルームには六角形のテーブルが並ぶ。三つの学年から各一クラスが参加する。テーブルには各学年二人ずつ座る。学年を超えて一緒に食事をする時間だ。

この日は、一、三、五年生が参加。この日の献立は、サンマの蒲焼、野菜の味噌煮、牛乳煮、パイナップル。ご飯は、テーブルの中央に置かれたお櫃から五年生が茶碗によそう。学年や体格をみながら巧みに量を調整しているのに感心した。

食事が始まると、三年生の女子が昔の給食のことなどいろいろと質問してくれたので、楽しい会話を交えての食事となった。一年生も、箸でサンマをあつかうのにやや苦労しながらも無事時間内に完食。単に栄養をつけるだけの給食ではなく、ランチルーム上級生と下級生の交流、食事のマナーの習得などの教育の場になっていることが認識できた。

約一カ月後、昭和祭の際の校友会バザー会場で、五年生の女子から「この間、ランチタイムにお話していただきましたね」と声をかけられた。こうした在校生のコミュニケーション能力にはいつも驚かされるが、これもランチルームの成果なのだろう。



日ごろのランチルームの風景

（二回生 中田 彰 生）

## 第7回 桜友会総会・懇親会

第7回桜友会総会・懇親会は2012年9月30日、学園本部館3階の大会議室で開催された。この日は、台風17号が関東に接近、春に初等部を卒業した新会員（中学一年生）は、午前中の同期会だけで帰宅、午後の懇親会も時間を短縮せざるを得なかった。

総会では、役員のうち委員の定数を「7人」から「7人ないし10人」とする会則の改定、第3期の役員の選任、初等部創立60周年を記念して寄付を募ることの3議案が、執行部提案どおり承認された。（役員名簿、会則改定内容は7面に掲載）

続く懇親会では創立直後に教壇に立たれた間藤侑先生と有賀三奈子先生に対談形式で当時の思い出を語っていただいた。OGバンド「チームメロス」の演奏に続き、50回生の落合さつきさんと小蘭江奏波さんの進行でのクイズ大会。二人が作った〇×問題に最後まで正解を続けて1等賞のマッサージクッションを獲得したのは、前校長の江口雄輔先生だった。

## 「至福の時」

前昭和小学校校長 江口 雄輔

休日の朝、日向ぼっこをしながら新聞を読むのはむかしからの習慣ですが、最近は楽しみが加わりました。クッション型のマッサージ器を背中にあてがっているからです。「ん？ 終わりかな」と一



瞬、紙面から目をはなすと、またこりこり、ぐりぐりと可愛く動き出します。エライもので、疲れたと不平をもらしたり手を抜いたりはしません。スイッチどおりに腰から背中まで、まんべんなく揉み続けてくれます。私は脳ばかり軟化して体が硬くなる年頃ですので、このクッションは孝行息子みたいなものです。

昨年九月の桜友会の懇親会、楽しくしかも充実したプログラムのあと、最後は抽選会でした。およそくじ運とは縁遠いのですが、最後に一等賞が発表されると、どうしたことが当選者は私です。申し訳ないような気がしたものの、このクッション型マッサージ器を年相応の贈り物として、ありがたく頂戴しました。

マッサージ器といえば、いざ購入してみると大きくて置き場所に困ったり、オモチャみたいに頼りなかったり、ということがありがちですが、このクッション型のは実用的で、なかなかの優れものです。おかげさまで好天に恵まれた休日の朝など、しばし至福の時を味わっています。

今年の桜友会は、初等部創立六十周年ということもあって節目となります。十三歳の中学一年生から六十歳代後半の先輩までが、昭和小学校という母校にして母港を思つて相寄り集うのは素晴らしいことです。年若い卒業生が大先輩や昔

の恩師から貴重な話を聞くこともあるでしょうし、年配の卒業生がいまの若者の感覚をまちかで知る機会ともなるでしょう。

昨年と同様に、今年の総会にも懇親会にもたくさんのお客さんが参加してにぎやかに交流できることを期待しています。

## 桜友会に参加して

有馬 じゅん（29回生）



この度、参加することになったのは、縁あって娘二人が初等部にお世話になっていることがきっかけでした。29回生は私一人でしたが、在校生の子供のいらつしやる先輩方にお声かけ頂き、結局は最後まで楽しい時間を過ごすことが出来ました。

間藤先生、有賀先生の初等部創立当時の貴重なお話も拝聴でき、自分の在籍していた当時や、娘たちの現在を比べ、変化しながらも変わらぬものは代々引き継がれていることを知り、嬉しく感じました。グリーンホールの前にある木も、昔からある木だと聞き、今はその木にライトが飾られ、日の暮れる頃には一つ一つのライトが存在を示し、「世の光となるう」の如く、素敵なクリスマスツリーとなつていきます。

今回クイズ大会で三等に当たり、寄稿している次第ですが、母校Ⅱ母港とお話

のあったように、初等部は、皆がいつでも戻つて来られる場所であつてほしいと思います。

## 線になる記憶

越智 愛（28回生）



「ひかりひかり私たちは」この歌は、私が昭和の幼稚部時代に何度となく歌った歌です。

桜友会同窓会に出て、実はこの歌が初等部で校歌のように歌われていたものであったことを初めて知りました。在園時代は何気なく歌っていましたが、先生は私たちに、創立当初の先生や先輩方の想いや建学の精神を伝えたかったのではないかと思います。今更ながらに先生の教えを受け止めた瞬間でした。

この会に出ると、在学時代のばらばらな点として残っていた思い出や記憶が、恩師や先輩、同級生と話す中で、線として繋がるがあります。今でも行われている行事が、実は初代から脈々と受け継がれているもので、多くの人の想いが込められていたものだったと知ることがあります。私はこの発見が楽しみで毎年同窓会に出席しています。

来年もまた新しい発見と、卒業以来足が遠のいていく同級生との思いがけない再会とを期待し、出席したいと思っています。



## 第7回桜友会総会

### 間藤先生・有賀先生の対談

平成24年9月30日

太田鈴子(司会) 初等部が来年60周年を迎えるのを機会に、同窓会としては創立当初のさまざまなことを記録していくことになりました。今日はその1回目として、私どもを教えてくださいました創立当初の先生方に、お話を伺います。1

回生の3年生から6年生までの担任をされた間藤脩先生、3回生の1年、4回生の1、2年生の担任をされた有賀三奈子先生に、いらしていただきました。間藤先生はわざわざ新潟からいらしていただきました。

間藤先生は、今の筑波大学、かつての



東京教育大学心理学部から心理学科に転科され卒業されました。有賀先生は東京女子大学心理学科を卒業されています。初めに、当時は名もなかった昭和小学校にいらした、ご事情からお伺いしたいと思います。

**間藤脩先生** 実是我々二人とも小学校の教員免許をもっていません。もともと昭和女子大に附属の教育研究所が作られる予定で、私はそこに就職という事で、人見先生には1回だけお会いしました。その時、小学校が出来たばかりだから、ついでに手伝って体育でも教えてほしいという事をちらつと話していたと思います。

その後、昭和30年3月にスキーから帰ってきたところ、昭和女子大が火事でまる焼けになったと聞きました。主任教授から「就職はあきらめなさい、でもせっかくだからご挨拶をかねて火事見舞いに行きなさい」と言われて行きました。もう一面焼け野原でした。そこに初等部の児童たちが椅子を並べて、劇か何かの練習をしていました。

そこで、ただ若い男が来てちよいといと思われたのか、壊れた椅子や机を修理してくれとトンカチを預けられました。就職出来るのかもわからないまま、トントン修理をしているうちに、初等部の教員をしてくださいという話になりました。私は「いえいえ、とんでもない、

小学校の免許有りませんから」と。私は中学・高校の数学の免許は持っていました。が、小学校の免許が無いのでお断りをしていました。初めは体育だけでも良いからと言われ、体育だけならばと受けるところ、2、3日経ったらエスカレーターして、全科目を頼むと、もう引き受けざるを得ないというのが、発端だったのです。

後から聞いたのですが、別の大学の卒業生が、1回生の担任として赴任することになったそうです。でもその人が火事の為か、顔も全然見せないの、学校としても困っていたようです。

学生時代、小学校と中学校のテストを担当してくれと言われたことはありましたが、実際に教育現場に立つたことは無いので、小学校の先生がどんなふうに立つのか、どう生活をするのか、全く知らないまま、2週間後に小学校教員生活が始まったわけです、これがそもそもの間違えで、昭和の1回生の教員たちは大変な目にあっただろうと思います。

**太田** 有賀先生はどのような縁で、昭和にいらつしやいましたか。

**有賀三奈子先生** 私は60年以上前、大学に入学するために九州の田舎から、昭和女子大に寄宿舎があると聞いて上京してきました。朝、東京駅について、渋谷から三軒茶屋でおり、「今日泊まるこころが無いのです」と、人見(楠郎)先生に申し上げたところ、大学生と同じ寄宿舎に入れていただきました。そして高等部の3年生に編入したのです。

大学は数学科に行くとし上げていたので、3年生の1年間、昭和で勉強させ

ていただく間、他大の数学科のことを調べていました。

そして受験用の写真を、人見先生に撮っていただきました。人見先生はいつもカメラを持っていたらして、子どもたちを撮っていました。私は貧乏でしたから、写真屋さんで撮ってもらうなんて考えてもいなかったのです。人見先生は「内田はバックが無い方が受験写真になるので良いだろう」と、わざわざ麦畑の真ん中まで行き、後ろに校舎が写らないように撮ってくださいました。

他大の数学科に、そして心理学科に行きました。10月1日に卒業したところ、人見先生にご挨拶に行きましたところ、「ではこれから高等部の心理テストを手伝ってくれ」と言われ、しばらくお手伝いさせていただきました。

そうしたら3月の大火です。九州からの呼び出し電話で、昭和女子大が火事だと聞いたがどうだ?と言われて知り、お手伝いに行きました。軍手をはめて、燃えカスを片づけたりしたんです。その時は、間藤先生にはお会いしていません。

人見先生は家のピアノを学校に貸していらしたのですが、そのピアノが燃えないように：一人でピアノをかついで校庭に出されたとか、なんか伝説のようになっています。朝、東京駅について、渋谷から三軒茶屋でおり、「今日泊まるこころが無いのです」と、人見(楠郎)先生に申し上げたところ、大学生と同じ寄宿舎に入れていただきました。そして高等部の3年生に編入したのです。

3月の大火の後、初等部は幼稚部の園舎を借りてとにかく2年生まで終わりました。(年度が変わり) 間藤先生が3年

生、私が1年生を担当することになりました。

人見先生からは、高等部か初等部に来るようにと言われたのですが、卒論を書くために子どもたちと接していたので、初等部の方が私に合っているかと思いい、初等部の先生にさせていただいたのです。

## 副田先生の思い出

**太田** 間藤先生、有賀先生と同じ頃から初等部で教鞭を執られた副田先生は、今年で103歳になられました。副田先生との思い出をお話いただけますか。

**有賀先生** 戦時中、韓国の京城（現在のソウル）にある日本人小学校に通っていた時の担任の先生が副田先生でした。副田先生が日本に引き揚げてきてから、NHKラジオの「尋ね人」で教え子の行き先を一人ひとり問い合わせてくださり、連絡が取れるようになりました。

私が結婚して赤ちゃんができ、人見先生に1年後に退職したいとお話したところ、「代わりの人を連れてきなさい。」と言われ、当時長崎にいらした副田先生にお電話で悩みを打ち明けました。するとすぐに長崎から上京して人見先生と会ってくださいました。長崎の学校を辞めて、4月から初等部の先生になつてくださったのです。副田先生が48歳の時でした。

それから24年間、副田先生は心と体を遣いながら一生懸命教えられました。今日は副田先生とご縁のある方が何人もいらして嬉しいです。

**太田** 間藤先生は、2年間副田先生と隣のクラスの担任をなさったということですが、何か思い出されますか。

**間藤先生** 副田先生との思い出を一言で言いますと、「支えていただいた」ということです。

私は教師になるつもりもなければ、教育実習の時に教壇に立つという経験もありませんでした。先生がどういうことをするのかイメージがないまま教師になりました。

とても厚い指導書を渡されて目を通してのですが、自分で毎日ガリ版を書いて刷って教材を作りました。揃って並んでいた椅子はばらばらにずらし、一人ひとりと目が合うようにしました。当時、45分の授業をして15分休憩という形だったのですが、私はどうしても納得がいかず、試しに90分間授業をやり、30分休憩という形にもしました。自分流に授業を進めていましたが、本当にこれで良いのか、という不安もありました。

そんな時、副田先生に授業の進め方などをお話すると、全てを否定するのではなく「それは素晴らしいですね。でもこの部分が少し足りないかもしれませんよ」というアドバイスをくださいました。



た。そのおかげで副田先生にバックアップしていただいている、という安心感がありました。

## 林間学校での冒険

**太田** 間藤先生の授業はとても楽しそうですが、日光の林間学校でも間藤先生の提案で登山する山が現地で変更になったと伺いました。その結果、太郎山という岩場もある山に登ったとのことですが、そのいきさつなどをお話いただけますか。

**間藤先生** 当初、男体山に登る予定でしたが、どんな山かわからなかったため、子どもたちと登る前に一人で往復4時間ほどかけて途中まで登ってみました。中学生のときに山岳部に入ってから山登りをしていたからでしょうか。物足りなさを感じました。

ふと奥に目をやると、太郎山が見えました。たまたま、知り合いの日本山岳協会の方が中禅寺湖の近くに住んでいらしたので、人見先生に「日本山岳協会の人」が近くにいるので、（助けてもらい）ザイルを使って岩場を登ったら面白い体験ができると思います」とお話ししました。「危険ではないのか」という心配はされましたが、「ザイルをしつかり結んでフォロースれば大丈夫です」とお答えすると、やつても良いと許可ができました。でも人見先生は高所恐怖症なので、参加しませんでした。

子どもたちに聞いてみると、男の子11人全員が挑戦したいと言ってくれました。山へはバスではなく、トラックの荷台に乗って行きました。山道を走るにはトラックしかなかったのです。山頂近くの岩場はザイルでフォロローしながら、無

事に登頂することができました。

帰ってきてから、父母の方に「事故が起これたらどうするつもりだったのですか」と怒られ、そう言われてみればそうだな、と思ったのを覚えています。でもその時は絶対大丈夫だと思い込んでいたのです。人見先生がすぐに判断をし、許可してくださいとおかげで、様々なことができました。今の時代では信じられないようなことだと思えます。1回生は前例がないために、そのような経験ばかりだったのです。

## 遠足の下見で

**太田** 遠足の場所などの下見をお二人でされたことも多いということですが、そうした下見のエピソードなどお伺いできますか。

**有賀先生** 間藤先生と私は新人なものですから、遠足の前に二人で下見に行つてこいという命令をいただくわけ。

**間藤先生** 若かったんです。有賀先生 若かったんですね。いま80です。二人とも。

ユネスコ村の下見に行つたときね。あそこは山ですから坂道が多いんです。で、ここがお弁当を食べるところ、ここが記念撮影するところ、ここがトイレタイムなどと、二人で決めながら歩いていると、突然雨になっちゃったのね。

そしたら間藤先生はね、ワーツと靴を脱いじやつたの。私も真似して靴を脱いじやつたの。そしたら坂道で、石がゴロゴロですごく足の裏が痛かったんです。その記憶しかないの。傘を持っていなく

て二人で靴だけ大事に持って、濡れながら坂道を降りてきました。あとで考えてみると、自分はそのとき一足だけしか靴を持っていなかったの。間藤先生もそうでしたか？

間藤先生 その記憶、私の中にはないんです。多分、靴がもったいなかったんでしょうね。当時の靴なんて今と違って濡れると大変なことになったんじゃないかと思うんですよ。まあ、そういうことでしょうね…多分。

## 総合学習の先駆け

太田 いま、初等部の代表的な行事になっております総合学習ですけども、すでに最初のころからその芽生えがあつて、先生方が色々工夫をなさったことがあると伺っておりますが…

間藤先生 何回も言うんですけど、私の中に教師のイメージがまったくないというのが、幸か不幸かというのでしょうか、一回生にとつて。ですから授業も理科も算数も国語も全部一緒にしてゴチャゴチャと混ぜてやりました。テキストはこうしたものを教えるんだということは、頭の中に入っているんですけど、それを別々に教えずに一緒にゴチャゴチャと入れ込んで、そして私の中で料理していくという方法で…

例えば6年生の時、ガガーリンが初めて宇宙を飛んだんですね。翌週ぐらいにその記事を使った問題をつくったような記憶があります。そんな風に何がなんだかわからなくて、総合学習なんて言葉もなくて、そういう滅茶苦茶な中でやって

いたんです。

いつの間にか、5年生の時に6年の教科書全部終わっていたんですよ。

で、することがなくなつて、何をしようかといったときに、劇を使うことを思いつきました。私は劇をするのが好きで、学生の時に脚本を書いたりした経験があつたもんですから。また宮沢賢治が好きだったもんですから市販されているものを利用することもあつたし、私自身が勝手に脚色して書いたものもありました。劇を使って授業の身をそこの中に入れ込みながら。どこかに発表するのではなく授業そのものに、そういうものを入れ込んだんです。

考えてみれば、そういうものが総合学習になったんですね。

ついでに、もう一つ。この生徒たち、特に男の子たちは、別の中学校に行かなくちゃ行けませんね。こういう滅茶苦茶な授業をやつて、実際の学力はどうなっているんだろうかとちょっと不安になった。当時、有名だった、いまでもそうですが、四谷大塚進学教室っていうのがあつたんですね。その模試を受けたいという生徒がいたら行こうと思つて話すと、何人かが行つたんです。そしたら成績発表で、1番、3番、5番、7番：昭和小学校がずらりベストテンの中に入つたんです。えつとびっくりしました、こっちが。

これは、こうした総合学習が学力の面でもよかつたのかな。振り返つて考えてみると、とにかく教えられるというより、自分で考えて行動しなさいというということが効果的であつたのかな。私が後に

大学の教師になつて教えるようになって、も、そのときの小学校の経験が私の原点になつていように思います。

人見先生がモットーとしておられたのは、子どもには本物を経験させたいということでした。聞いた方も一杯いらつしやるかと思いますが、「どんなことでもいいから本物を」。いろんなものが集まっていますよね。人見先生が集められたものが一杯ありますよね。それみんな本物。「そういうものを子どもたちに体験させることがとても大事なんだよ」つて、いつも言われていた。それは、私の中にバイブルのように残っている。それが本物なの、ということを考えて小学校であろうが幼稚園であろうが、中学校であろうが、大学であろうが：これなんだと。

人見先生つてなんて偉かつたんだろうか。初等部にいたときは、私は反発ばかりして、本当に反抗期だったんですね。なんかあると、「先生、主事先生来たよ」つて生徒たちが助けてくれたんですね。とにかく行儀も悪かつたし、子どもが助けてくれたんですけどね。

## 教育は命懸けで

太田 いろいろ、私たちも思い出すところがあるようなんですが。有賀先生は何か思い出されますか。

有賀先生 あなたたちのご両親には本当に頭が下がります。昭和初等部ができたころ、公立の小学校は日本中に2万1535校あつたそうです。私立は124校だったそうです。そんなときに、

人見先生は初等部を作ろうと思われた。やはり一貫教育の良さ、そういうのは生徒を育てるけれども、親ごさんが偉かつたなと思いますね。

公立の学校が沢山あるのに、月謝を払つて良い教育のためにお子さんを私立の学校に上げようという、愛情に頭が下がります。そういう二両親は、教育にずいといと関心を持つてくださった。だから、教師も育つたんだと思うんです。

私が1年1組を持つたときにね、お弁当の時間に、ある子が「先生」と立ち上がったの。舌をかんじやつたの。血が止まらないの。その子、全然泣かないんです。血をだらだら流しながら学校の外に出て、三宿の校医の先生のところまで連れて行つて、ちゃんと縫合してもらつて帰つてきたんです。



一番最初、ああ、この子と死のうと思つた。でもその子死ななかつたの。こんなに大きく育っちゃつた。

た。(司会の太田さんを指差す)。(拍手)本当にありがとう。そのとき死なないうちよかつたから、私も80まで生きることができたの。

でもね、これ私だけの問題じゃないんですよ。あの教師つてね、本当に子どもたちと死ぬ気であるんです。楽しいときは楽しむし、それから苦しいときはやっぱり一緒に苦しんでるんです。だから、あなたたち、自分のことを大切に思うな

ら、やっぱり先生の熱意も、親の熱意も分かってほしい。

去年いらした岡野先生13回生が、いいお話をなさいました。「医学はどんな時代にあっても世の中の役に立つ」と、おっしゃいました。「世の中の役に立つ」そんなんですよね。そのために学校の校訓が「世の光となるう」というんでしょう。「世の光となるう」というのは、オリンピックの選手がたいまつを持ってみんなの先頭に立つだけが世の光となるんじゃないですよね。もう誰かが机の下に鉛筆を落としたといったら、その下を昔なら、ろうそくに光を灯して探してあげるでもいい、懐中電灯で照らしてさがしてあげてもいい、それでもやっぱり一つの光ですよ。だから「世の光となるう」を狭い意味につかまえないで、広い意味で、大きな心で考えながら育ってほしいなと思います。

御さんに、先生方に、人見先生に育てていただいたと思います。感謝してます。人見園吉先生を知らない方はどれくらいいます？ ああ、園吉先生を知らない方もいらつしやる。園吉先生はね、卒業式には「ぼこうは、ぼこうです」とおっしゃいました。母の学校はね、母の港ですって。だから卒業生はいつでも帰ってらつしやいと、おっしゃいました。だから卒業生、帰ってきてください。総会ときは出席してください。それから、人見園吉先生は「感謝する心があると自分も育つ」とおっしゃいました。感謝する心があると、自分の中に宝を育てる、宝を積むとおっしゃいました。だから、どうぞ周りの方に感謝してください。で、ろうそくの光になってください。お願いします。

太田 先生、ありがとうございます。きょうまたお教えいただきましてありがとうございます。そろそろ時間がきておりますけど、間藤先生、感動する授業をずっとなさっていらしたと伺っています。長く教育の道をあゆんでいらして、最後になにか教育に関して、感動をあたえるということについてお話いただけたらと思います。

間藤先生 園吉先生との想い出を。私は1回生を卒業させたとき、人見楠郎先生から、もう一度次の学年の担任をしてくれないかと頼まれました。私は、実は自分が如何に子供のことを知らないか、心理学というものをやっていたながらも、全然真面目に勉強しなかつたなということに気づき、もう少し勉強しようと思

う、それを申し上げました。楠郎先生はもう一年だけとおっしゃんですけど、私が園吉先生のところに行つて「実は自分はこんなことを考えているんだけど」といいましたら、先生は温顔で「ああ、そうか。わかった。やりたまえよ」と私を励ましてくださいました。

いまでもそのときの園吉先生のお顔が印象強く残っています。それがなんであるかは分からないのですが、いろんなものを大きく受け入れてくださる。園吉先生もそうですけど、私がさんざん反抗した人見楠郎先生も、あとで自分が少し大人になって少し勉強していくと、自分の縁側の中で一騒ぎしていただいだけ、自分の小ささを感じて、自分がああいうことできるかと考えてみると、まだできないだろうという感じがあります。まあ、こんなことで：

太田 ありがとうございます。時間がまわりました。会場のほうからもこんなことをきいておきたいということがあると思いますが、この後も先生とお話する機会がございますので、またいろいろ伺っていたきたいと思っています。

先生方、本当に私どもの、そして初等部の第一歩を育てていただいたのだと思います。きょうもまた感動を与えていただき、またお教えいただき感謝しております。お忙しい中、お時間をいただきましたが、本当にいい時間だったと思います。これからもお元気で、私共をお導きいただきたく思います。本当にありがとうございました。

## 桜友会 第3期役員

(2012年度～2014年度)

顧問

平尾 光司理事長

会長

小泉 清裕小学校長

副会長

中田 彰生(1)

委員

粕谷 佐知子(4)

委員

吉田 昌史(6)

委員

川上 みゆき(1)

委員

太田 鈴子(3)

委員

大隅 剛(5) 〓新任

委員

師岡 文男(8)

委員

小園江 園香(18)

委員

前之園香世子(21)

委員

増井 利映(36) 〓新任

委員

萩原 志保(37) 〓新任

委員

竹山 恵美子(11)

委員

山口 俊行(20) 〓新任

委員

瀬村 寿美男(11)

委員

佐藤 星子(35)

委員

黒崎 瑠美子(32)

委員

(カッコ内は卒業回)

## 会則の改定

第4章 役員及び職員

第7条 (役員)

本会に次の役員を置く。

一、会長

1名

二、副会長

2名

三、委員

7名

四、監事

2名

五、学年監事

各学年若干名

六、顧問

理事長及び小学校長のうち、委員の定数を「7名ないし10名」と改定する。



## 昭和というふるさとに 時代を越えて集まって

みかん狩りの楽しさ

永井 順子(旧姓 橋本)

(26回生)



十二月十六日、桜友会みかん狩りに参加させていただきました。前日は冷たい雨が降り、どうなることかと心配しましたが、当日は晴天。暖かく、東明学林に近づくにつれ、富士山の裾野まで見えてくる程の好天気でした。

参加メンバーは第一回生の大先輩から、今年度桜友会に入会したばかりの中学一年生までと、その家族。それほど年齢差があるにも関わらず、和気あいあいと集合写真を撮影のち、みかん狩りをスタートしました。学生時代と同じ注

意をなつかしく聞きました。

みかんは太陽に向かって高く高く実っていました。はしごに乗って上の方のみかんをとる人、目の前のみかんを次々にほおばる人、せつかくとったみかんを落としてしまい、坂を転げるみかんを追いかける人……。その度にあちこちから笑い声が上がると楽しい時間でした。小学一年生の娘は、東明学林の先生から木登りのコツを教えていただき、すっかり安定したバランスで木の上に手を使わずに立てるようになっていました。我が家はあつという間に約五十キロのみかんを収穫。たくさんのお土産ができました。

その後、参加者全員で一つの輪になって会食をしました。初等部在学中の娘のいる我が家は現在の初等部の話をしたり、先輩からは昔の懐かしいお話をお伺いするなど、楽しいひと時でした。昭和での生活がまだ四年目の娘にとっては、

昭和の歴史を覗く、興味深い時間だったようです。

昭和というふるさとに、世代を超えて、同じ教えをいただいた人達が集まり、笑いの絶えない素晴らしい一日を過ごすことができました。人見先生の、「いつでも昭和に戻っていらつしやい。」という声を思い出す同窓会でした。



28回生 橋本圭司さん撮影

## 桜友会バザーを提案して……

桜友会昭和祭バザー実行委員長

大石 恵津子(三回生)

昨年5月、初等部一年一組以来の友人のピンチヒッターとして出席した桜友会の学年幹事会の議題の一つが、2013年に迎える『初等部創立六十周年記念に際しての桜友会からの募金について』でした。

「寄付には心がこもらなければ、意味がない。」いつも思っているため、思わず「みんなでバザーをやって、力を合わせて資金集めをするのはいかがでしょうか?」と発言してしまいました。それがきっかけで、桜友会の役員からバザーの開催を頼まれ、引き受けることになりました。

八月八日、会長との第一回目の打ち合わせをした時に私を実行委員長に任命するといわれ、大きな責任をお引き受けしてしまいました。

九月三十日の桜友会総会時を第一回の回収日、その後は私の自宅で受領・収集すると決めその旨会報に掲載していただき、九月になって呼びかけに応じてくださったバザー担当委員の方を交えて、具体的な準備が開始されました。

ところが、総会の当日も紙袋四つに収まるほどの成果しかなかったため、学年幹事の方々へ再度の協力要請の手紙を出していただきました。

皆様への呼びかけが効果を上げ、チラホラと宅急便が届き始め、私達三回生、二回生、一回生、その他の学年の方々か

らも、そして遠く九州からも、段ボールに沢山の品々が送られてくるようになり、商品の仕分けと値付け作業をした十一月五日には部屋がいっぱいになる程の商品が集まっていました。

また、個人的に手芸サークルでいろいろな作品を手作りされている十七回生と二十一回生の御姉妹の方からもバザーへの参加を申し出ていただき、商品ラインナップは完璧となりました。

昭和祭前日の十一月九日には、南側校庭のバザー用テントに「桜友会バザー」の看板や飾り付け、机や椅子の準備をしました。天候にも恵まれた昭和祭初日の十一月十日には、準備したチラシを配ってくださった役員の方々の協力もあり、テントは人だかりができる程の賑いとなりました。準備した商品も見ると売れてゆき、二日目用に取り置いておいた商品も補充したほどでした。

こうして2日間の総売上は約二十万円。目標よりは大幅に下回ってしまいましたが、第一回目としては、大成功だったのではないかと思います。そして、桜友会の会員の間で、何十年ぶりの電話やメール等でコミュニケーションが活発になったこと、会員皆様のご協力を得られたこと——が今回のバザーの成功の鍵となったと思います。

最後に、今回のバザーに対しましてご理解とご支援をいただきました初等部の小泉校長はじめ現職・恩師の先生方、初等部父母会、幼稚園父母会、中等部卒業生そして準備から実施までご協力くださった桜友会会員の皆様に、心から御礼申し上げます。